

34 中津藩医山辺文伯と産育編について

石原 力

山辺文伯とその著書『産育編』については、これまで解明されずに至っている疑問点がある。今回若干明らかになし得た点を報告する。

一、山辺文伯についてはまとまった伝記がなく、墓所も、生没年すら未詳である。中津藩奥平大膳大夫（昌鹿・昌男・昌高三代）十萬石の藩医であったが、黒屋直房の『中津藩』や郷地史料にもその名はみられない。『賀川口伝覚書』に、明和元年（二七六四）九月「上京之時賀川玄悦子者二婦人産前後ノ療術 盡 口授ヲ得。此老翁七十有余（実は六五歳）」とあるのが活動の最初の記述である。なお「京都ニ在リテ吉益東洞ニ学ビ」と『日本産科叢書』略伝にある。一方、彼を有名にしている英国鉗子図に、寛政十年（二七九八）五月二十日「之を瀉す」とあるのが彼の記録の最後である。これは

Snellie 鉗子紹介の片倉元周著『産科発蒙』序文寛政五年（二七九三）より五年後である。中津藩医前野良沢の弟子嶺春泰（寛政五年没）所蔵の英書が両者の共通源の可能性が高い。

成立年の明白な著書には『産論』の前年明和元年（一七六四）の『賀川口伝覚書』、これを増補した『婦人産前産後腹診手術法』、明和九年（七二二）十月序文の『産育編』、安永八年（七九）の刊本『傷寒論箋註』、天明二年（八二）序文の刊本『金匱要略箋註』があり、その他『痘疹要訣』、『簡易効方』もある。また書名のみものものに『経絡詳義』、『痘疹証治』、『徽瘡証治』、『婦科要訣』が知られている。『産育編』凡例では家伝の「独龍散」を紹介、門弟に触れており、医師の家系で弟子を養成していたらしい。序にある東都浣花堂は家塾であろう。天明五年（一七八五）十月浣花堂で米藩の森順太が『産育論』を写している（国会図書館本）から、この頃まで家塾は続いたとみられる。場所は中津藩中屋敷があった鉄砲洲（中央区湊一丁目）であろう。

二、佐伯理一郎は『日本女科史』（二九〇一）で、賀

川家門籍に山辺文伯の入門署名が享和二年(一八〇二)にあることから、『産育編』の明和九年は「恐ラクハ誤」としてある。この門籍過信は緒方正清の『日本産科学史』(一九一九)にも引き継がれた。梶完治稿(一九四五)『明治前日本産婦人科史』では、同氏写蔵の門籍帳第二巻に「享和二年戌九月、江戸鉄砲洲(豊前家中)山辺文伯(最)廿四歳」とあり、第三巻の免許皆伝帳には「享和二年十月、東都山辺文伯」とあることまで披露しておきながら、佐伯説を踏襲している。廿四歳の文伯の生年は一七七九年となるが、その七年前に『産育編』は書かれている。素直にとれば著者は篤雅・文伯のまで玄悦に師事、玄悦の孫嫡系二代満定(蘭斎)に入門したのは篤雅の嫡子で文伯を襲名した最であることは歴然としている。明治大学図書館蔵の『門籍』原本をみると梶氏記載とほぼ同じであるが、巻三(梶氏とは二と三が逆)では「江戸鉄砲洲 豊前中津家中 山辺文伯 最 二十四歳(花押)」となっている。

三、『産育編』は東大図書館呉氏寄贈本が自筆校正本、同青洲文庫本には図がなく、寛政十年以前の写本と思わ

れ、東洋文庫本は『産育論』となっている。杏雨書屋本は『日本産科叢書』所収である。

四、『産育編』の諸厄利亜の鉸の、即ち鉗子を佐伯はSmellie若しくはPalfyn鉗子、緒方は両鉗子の紹介とし、古賀十二郎(一九四二)はSmellie、梶、阿知波五郎はPalfynとした。Palfyn鉗子は葉に窓がない匙状であるが、山辺の鉗子図の左図の左右両葉接合図では、各葉に窓が僅かながら見えるのでPalfynではない。また右図は、左葉を九〇度反時計回して英国式接合部と窓とを見せたところである。これと全く同じの図がSmellieのA Set of Anatomical Tables(一七五四)の第三七図である。

鉗子図の右方に上腕脱出遷延横位の際刀(curved knife)で肩より切り、鉤(crochet)で牽出する用具の図がある。これと酷似する図がGuillemeauのChild-birth(一六二二)にみられる。

(清風園診療所・第二清風園医務部)